

## 欲求阻止事態における行動の比較心理学的検討 II

鵜飼 信行

### I

前回の検討(鵜飼:1985)においては、母親から早期に隔離されて生育したニホンザルが表わす自分の身体部位のサッキングと抱く行動に焦点を当てた。それらの行動は、母親が居ないという欲求阻止事態で滞積する歪曲残留を解消する行動だと考えた。また、母親がもどらないかぎり、歪曲残留は滞積し続け、それらの行動は常同化する。そうした行動を表わすサルにおいては、内部平衡を回復するため、歪曲残留を解消することが目ざされ、したがって外部への適応は閉され、自閉的生活をするようになる。また、母親に向けるべき、サッキングや抱きつく行動を自分の身体に向けるようになるのは、それらの欲求阻止が緊張を結果し、身体感覚が目立つためではないかと考えた。

自分の身体部位のサッキングや抱く行動は、より早期に(107日以前)隔離された個体が表わした。それらの行動は、生活年齢が増すにつれて減少することが指摘されている(岡野:1983, 239頁)。今回は、より年齢の進んだ個体の表わす、自己の身体を噛むこと、自慰行動や以前に報告した(鵜飼:1975)特定個体の表わした奇妙な行動に焦点を合わせる。そのうちまずH個体が表わした奇妙な行動から取り上げる。

Hは88日目に母ザルから隔離され、幼少時にベニスのサッキングとひざを抱く常同行動を表わした個体である。

Hが表わした特異な行動は、空中に定位されたグルーミング(毛づくろい)行動である。それについて実験的に観察したのは十数年前で、Hが9歳のときであった。空中グルーミングを記述することから始める。

見慣れた観察者がHのホームホージの前に坐ると、Hは観察者に向いて坐り、空中グルーミングを始める。しばらくそれをしつづけると、セルフグルーミング(自分の腕をする)に移る。このように、空中グルーミングとセルフグルーミングを交替にする。これらが止むと、空中に定位されたリップスマッキング(親愛の表情と言われている)や、空中に定位された目に向ける行動をする。空中グルーミングでは、Hは観察者の方に正面を向けているが、Hの視線は

観察者のそれからはずれている。リップスマッキングは、相手と距離を保っていても信号機能を果す行動であるが、Hはそれをするときも、視線は観察者の視線からはずれている。目を向ける行動も同様に空中に定位されている。つまり、空中グルーミング、空中リップスマッキング、空中に目を向ける行動をする際、Hの視線は観察者の視線から少しはずれた、ほぼ同様の点に向けられる。

このような空中に定位された諸行動パターンを見て想起されるのは、Lorenz, K. が記述した真空反応 (vacuum activity) である。真空反応の例としては、空腹のムクドリが何もない空中で餌をとらえる行動をし、止まり木にもどって食べて飲み下す行動をしたことが記述されている。このように、真空反応は当該の衝動エネルギーを解消すべき解発刺激が長期に渡って現れず、衝動エネルギーが過度に蓄積されて、解発刺激が存在しないにもかかわらず溢れ出した結果の行動だと考えられている。したがって、何もない虚空の中で遂行されるのである。

観察条件とHの行動との対応をまとめるとつぎのようになる。

- 1) ホームケージで単独でいるHをビデオカメラを通して観察する条件、つまりHの前に観察者がいない条件：空中に定位された諸行動は生じない。
- 2) ホームケージで1歳時から共に生活してきたW個体と一緒にいるのを、ビデオカメラで観察する条件：空中に定位された諸行動も、Wへのグルーミングも生じない。
- 3) H単独あるいは、Wと共生で、見慣れた観察者がいる条件：空中に定位された諸行動が生じる。

もしHの空中グルーミングを真空反応とするなら、Hにグルーミングの衝動が過度に蓄積されているにもかかわらず、相手がいらないために空中グルーミングが生じたということになる。しかし、1歳時からともに生活してきたWと一緒にいても、Wをグルーミングすることはない。グルーミングの衝動が高まっているなら、Wにグルーミングが向けられるはずである。ホームケージで、見慣れた観察者が通常の観察位置にいる場合には、単独でいようと、Wとともにいようと必ず空中に向けられた諸行動が生じる。したがってHの空中グルーミングは、Lorenz の言う真空反応の範疇には入らないことがわかる。また、観察者との関連で生起することが推測される。

つぎにHが見たことのない人間や、変装した観察者が観察位置に坐る条件を設定した。その条件では、空中に定位された行動は生じなかった。摂食時には、観察者が居ても生じないが、食べ終って水を飲むと空中グルーミングがはじまった。交尾期に雌と出会った条件や、Wとひさしぶりに出会った条件では、観察者がいても、空中グルーミングは生じていない。観察者より関心をひくものがある場合には、空中グルーミングは生じないと考えられよう。そのほか、一般にグルーミングが生じ難いと考えられる条件を設定した。それらは、ホームケージ以外の目新しいケージに入れる条件、空腹の条件、雨天の条件である。その場合には、頻度が減少する傾向があるが、観察者が居る場合には、空中グルーミングほかの行動は生起した。

このように見てくると、Hの空中グルーミングは、見慣れた観察者との関連で生起すると行ってまちがいないであろう。以上のような結果をふまえて、以前に行なった考察では、衝動エネルギーの過多、過少とか変形とかからでは、空中グルーミングの生起は説明できず、Hの内面性を問題にすることなしには、理解できないのではないかと示唆するにとどめた。

しかし、考えてみると、空中グルーミングを真空行動の発現要因となる衝動エネルギーの過多とか変形とかによって説明する立場と、内面性の理解から接近しようとする立場とでは、根本的と言える立場の変更がある。当時は、その点に充分の自覚をしていなかった。つぎに、それらの立場のちがいに言及する。

## II

Buytendijk, F. J. J. は、「人間と動物」と題された著書において、比較行動学 (Lorenz が開いた Ethology) や行動主義心理学と対比しながら、彼の比較心理学の立場を明確にしている (Buytendijk : 1970)。上述の変更、つまり、客観的科学的な理論体系から、人間や動物の内面性を問題にする立場への変更を、十分の説得力をもって説明するためには、Buytendijk のような研究者が1冊の本を必要としている。

ここでは、キーワードを用いて要約的に対照してみる。比較行動学や行動主義心理学は Organismus (有機体、生活体) の中枢神経系の生理解剖学的構造、機能を行動を通して解明しようとする。それに対して、比較心理学は、Subjekt (主体) の在り方を行動から理解することが目指される。つまり、前者においては、Organismus は複雑な生理学的構造とみなされ、特定の行動の生起は、生理学的過程の因果分析によって解明され则认为。特に比較行動学においては、行動は Ursache (原因) つまり衝動エネルギーによって生じると考えられる。後者においては、動物の行動も置かれた事態との有意義な関連として理解され、行動は Motiv (意図、動機) によって表われるのである。

前田嘉明博士は、Wundt, に代表される要素論的心理学 (心的体験を、恒常的な諸要素の結合とみる) においても、その批判から興ったゲシュタルト心理学 (要素の結合に代って、全体的刺激に応ずる力学的体制が主張される) においても、感覚を生理学的過程とみなす点においては同じであることを指摘している (前田 : 1952, 23~25頁)。つまり、感覚を「刺激に基づく興奮過程と感性系の機能とから結果する一つの生理学的事実としている」点において両者に変わりはないと。博士はつづいて、存在するのは、世界との関連の中で感覚する生活体であって、「感覚そのものなどは如何なる意味においても存在しない」と述べられる。「私が音を聴くのであって」耳や鼓膜やユルチ氏器官が聴くのではない。「動くのは私であって骨格筋が運動するのではない。」要するに「感覚する私があるのであって、感覚それ自身が独立に私の内部に存するのではない」と述べておられる。心理学において、感覚そのものがあるかのように扱か

われてきたのは、心理学の生理学に対する不当な依存によることを指摘されている。また、それは、精神と身体とを峻別したデカルト哲学の根強い影響によることが指摘されている。

引用した前田博士の論文のテーマは共感性である。生活体において、視覚、聴覚、触覚などの各感性領域や、感覚と運動においても、一つの *Einheit* に統合されてあるという観点から、共感性こそが感覚の本質であることを説かれている。その論文の中から、感覚をどのようにとらえるかについて、上述のことを引用させていただいた。この論文における博士の立場は、生理学に依存せず、具体的体験事実を事実にして純粋に心理学的に解明しようとする立場と見えよう。

上で述べた感覚は、人間の感覚であり、*Buytendijk* は、人間と動物の行動を比較する問題を扱っている。そこで、関係のないことを並べ立てているとの御批判があろう。しかし、最初から生理学に依存した枠組の中で研究を進めるのではなく、人間や動物を世界や環境世界の意味に対して応答している主体としてとらえ、その主体に表われ、その主体が表わす現象を、そのものとして研究対象にしようとする態度は共通している。ともに、そのような心理学を構築しようとしている。

三輪正博士は、人間の身体のもつ二世界的性格について述べている（三輪：1977, 31～32頁）。私の身体はすべてを見うるものであり、かつ見られうるものである。科学的認識は、この見られる側面から身体と世界を捉えたものであり、身体的認識は、見る側面から身体と世界を把握するものである。わり切った見方をすれば、現代の主流をなす科学的客観的心理学は、見られる側面からの把握である。前田博士や *Buytendijk* の立場は、見る側面からの把握を志向するものと言えよう。

*Buytendijk* は、比較心理学が人間と動物の共通性とともに、本質的差異も見い出さねばならないと言う。本質的差異を見い出そうとすれば、人間か動物のいずれかの本質的理解が要請される。当然のことながら、そのためには人間の理解を基準にすえる方が有利である。したがって、人間の本質的理解を目ざす哲学的人間学の知見が比較心理学を支える基準とされるのである。

哲学的人間学の間像の中核はいろいろに表現されるが、*Buytendijk* は心を宿した身体という統一体として世界に存在することと述べている。身体的世界内存在 (*leibliches Inner-Welt-Sein*)、脱中心的位置 (*exzentrische Positionalität*) などは同様の意味であろう。こうした原理は、感官様式、行動様式に具体的に表われる。そして、その表われは三輪博士の言う見る側面からの把握であるため、内面的、主観的なものとして述べられる。例えば、自己や外界の事物から距離をとり、対象化すること、行為に知が随伴し、障害の克服や、行為の改善がなされることなどである。

しかしながら、比較心理学は「汝なる主体性」を研究対象とし、人間と動物の内面性の比較を求めて、外に現われた行動の客観的な詳細な観察記述を研究方法とするのである。

以前の報告では、Hの空中グルーミングについて、衝動エネルギー論からは解明できず、Hの内面性に焦点を当てる必要性を示唆した。衝動エネルギーは、Ethology においては行動の Ursache と考えられるものである。さてつぎにHの空中グルーミングについて、現われた現象を大切に、あらためて検討してみようと思う。

### III

前述したように、Hはホームケージの前に見慣れた人間が坐ると、空中グルーミングなどの行動をはじめめる。そして、種々の条件を設定して実験的に観察した結果、空中グルーミングは見慣れた人間との関連で生起することがわかった。グルーミングは当然のことながら、本来相手個体や自分の身体に直接触れてなされるものである。

一方、人間がケージの真近に位置して、接触可能な位置になると、Hは幼少時に高頻度でしていた自分のひざをかかえる常同行動をし、グルーミングも空中グルーミングも生じない。このひざをかかえる行動は、前回の検討で述べたように、母親から引き裂かれた、欲求阻止状況で、代償的に現れたもので、自閉的な、外への関わりを閉ざした行動である。9歳の時点では、人間が接近した場合や、新しいケージに入れられた場合を除いて見られなくなっている。人間が接近した場合には、かかる姿勢をとり、動けなくなってしまう。距離が取られると再び空中グルーミングを始める。Hのグルーミング行動は、自分の身体になされるものを除くと、空中になされるものだけである。そのグルーミングでは、毛をわけるかのような動きと、皮膚をつまむかのような動きは、Hにグルーミングをしたくさせた当の相手から距った位置でなされるのである。

他の報告で、Hが交尾期に雌と出会ったときの行動を扱った(鶴飼：1977)。そこでも、Hが雌との関わりの中で現わした奇妙な行動を記述した。その行動は、雌の背に向けて、かなりの時間、同じ姿勢で目を向けつづけることであった。その視線は、それまでに見たニホンザルには見たことのない奇異なものであった。後にそのHの視線を思い出したのは、Werner, Hの「シンボルの形成」を読んだときであった。Werner は、Bühler, C. が記述した正常な2カ月児の凝視行動を引用して彼の解釈を加えている。Werner は、その凝視行動が子どもの外に存在する対象を定位した行動だとは考えられないと見る。乳児は対象を注視しているというよりは、対象を透視(gazing through)しているように見えると述べている(Werner, H: 1974)。つまり、自分の外にある対象を注視するというより、自分の視野に映った像にとらわれていると解釈しているのである。ここに述べられていた透視を読んだとき、Hの視線を思い出したのである。

Werner は、新生児期から3カ月頃までの時期を、自己と対象と他者が未分化で一体となった融合状態にあると考える。かかる状態をより具体的に理解できると思われるので、先に引用した前田博士の論文から関連する部分だけを、かいつまんで引用してみる。

Grunow は、聴覚に関する実験で、音の体験が次の4相に区別されることを明らかにした。

第1相：音が全く外界にあって、音源と結びついて明らかな対象構造をもつ。第2相：音が対象の緊密性のある程度失って、空間に一樣に拡がっているが、依然として音が体験者の外に知覚される段階。第3相：対象と自己の対立が失われ、自分が鳴りひびく、自分が音を出す容器であるという体験を生じる。第4相：鳴りひびく自分というものも消失して、音の対象性も喪失した、ただ体感的状態性だけが残る。Werner は、前2相を知覚に、後2相を感覚的把握とし、かかる体験は、色という視覚領域についてもえられると述べている。Werner によれば、客観性をもつ明証的な知覚が現実的に発達する途上に感覚体験が出現する。それは、明確な物らしさを欠く代りに、特定の身体的状態性を持つ点に特徴がある。このような体験は、一方で対象性が稀薄で主観の状態性を濃厚におびる点で、知覚と区別され、他方対象指向性（たとえ自己の身体に対する指向性であっても）を有する点で感情から区別されるべきものである。

自己、対象、他者が未分化な原初的融合状態では、感性領域において、かかる主観的身体的状態性が濃厚な感覚体験が営まれていると考えられている。

Buytendijk によれば、動物は世界とともに世界のうちに存在する。人間はそれだけにとどまらず、世界と対峙してもいる。人間の世界は、種に定型的な仕方では現象する環境世界ではなく、存在しつつ現象する対象的世界である。人間は認識しうる対象的客観的世界と足場をともにした体験しうる主観的環境世界という二つの現実に住む。動物、特に鳥や魚より下等な動物は、環境世界のうちで、知覚と運動との一義的統一のうちに生きている。かれらにとって魅するものは、客観的事実として存在するのでなく、接近する行動を惹き起す。人間は上述のような世界に生き、距離を置いてものを見ることができ、傍観者でもありうる。つまり静観的行動が可能である。

先に三輪博士が人間の身体のもつ二世界的性格について述べているのを見た。見られる側面からの科学的世界像においては、それぞれのものは、それ自身の位置、大きさを持ち、いわばそれ自体としてあり、かくれるものもない。そこでは、太陽は月とは比較にならない大きさをもつものである。見る側面からの身体的世界像においては、ものは私を中心に配列され、近いものは大きく、遠いものは小さく、現れるものと、そのかげにあって見えないものもある。近くにあり大きく見えるものは、われわれに直接の影響をもちやすいものである。細菌のように小さいものは、知覚にとらえられず、存在しないものであった。顕微鏡の発明によって見うるようになったとき、細菌への行動の可能性がでてくる。このように科学的世界像と対比するとき、主観的身体的世界において知覚に現れるものは、行動性と密接に関連し、知覚されたものは、可能的行動を反映してある。つまり、人間においても、知覚と行動とは相関的である。しかし、動物と比較した場合には、上述のように、対象に距離を置いた静観的行動をとりうることが特徴として指摘されよう。

人間環境で育てられた類人猿は、穴から入る光に舞うほこりとか生物学的に無意味なものに

いろいろと興味を示し、手話による対象指示が可能である。したがって、かれらにおいては、ある程度ものの客観性が実現されていると考えざるをえない。

それでは、ニホンザルであるHが交尾期に雌の背に向けた凝視行動はどのように解釈すべきであろうか。それは、果たして対象に距離をおいて静観している行動だと解釈できようか。あるいは魅惑され惹きつけられているとすると、それに続いて観察されたことであるが、接近した雌を恐れ、攻撃したりすることとどのように関連づけたいのであろうか。あるいは、男が女の裸体を凝視する行動になぞらえるとすると、感官性そのものを追求するようなあり方がニホンザルに可能であろうか。前述したように、筆者はWernerの透視を読んだとき、Hの視線を思い出した。それは通ずるところがあるからであろう。透視と同様の現象だとするならば、Hのした凝視行動は、そこにいる雌に定位されているのではなく、内外の未分化な自閉的な世界の中で、自分の視野に映った像にとらわれたあり方として理解される。上述したような、静観的態度の凝視行動と見るより、この理解の方が自然であろう。

しかし、正常な2カ月児の場合は、そうした凝視は、社会的対象ばかりでなく、幅広い対象に対してであろう。というより、世界と自己とが未分化な自閉的状态にあると言えよう。Hの場合は、身体を維持するための食べる、飲むなどの行動は、対象に定位してなされる。筆者は、透視のような視線は、空中に定位された行動の際や、交尾期において雌に向けてなされたのを見ただけである。人間における自閉性を特徴とする精神疾患においても、食べる、飲むなどの行動が、社会の規範からはずれるとしても、それ自体が損われるのはまれであろう。人となりがあってものは、意のままに扱いかいやすい。しかし、Hの凝視行動に関しては、交尾期に雌に向けられたことを指摘するにとどめたい。交尾期であったことがかかる行動が生じた1条件であろう。Hにとって関心のある、意のままになるものとはちがう、意味のある社会的対象に対してかかる行動を向けたのであろう。

さて、つぎにHの空中グルーミングをはじめとする一連の行動にもどる。Hが空中グルーミングを表わすのは、見慣れた観察者が現れたときであった。グルーミングは、自然集団においては、80%以上が血縁者間でなされるように、親しい間柄のサル間でなされる。Hのような隔離ザルにとっては、見慣れた観察者は養育者でもあり、グルーミングの対象になりうる。事実、Hより隔離条件の緩いサルではさし出された人間の手をつかまえてグルーミングをする個体がいる。とすれば、空中グルーミングは、見慣れた人間に関心を持ち、関わりたい気分の中で現れるとみることができよう。ただそうした社会的行動を向ける相手には、雌に向けられた凝視行動と同様に、内外の未分化な自閉性があらわになる。つまり空中グルーミングは、自閉的世界の中で、見慣れた人間の視野に映った像になされているのではないかと考えられる。以前の論文では、幻覚的に作り出された解発刺激に対する行動ではないかと考えた。人間における空想とか白昼夢に似た行動ではないかと述べた。しかし、そのように言ったのは、大きな飛躍があり、慎重さを欠いていた点が反省される。空想とか白昼夢は、描画ができ、過去の

回想ができ、死を知る人間にあってのみ可能である。客観的世界をもち、世界との断裂がある人間において、直観像、表象が可能になり、それらのことが実現される。表象が実現されない存在には、空想は原理的に不可能であろう。手話による対象の指示や、獲得した手型を連ねて造語のできる類人猿は、ある程度表象に近いものを持ち、直観像を感得したことは否定できない。確認はできないが、報告者を信ずれば、何を描いたかがわかる絵を描いた類人猿もいる。しかし、ニホンザルでは、そのようなことは不可能であろう。

このように見てくると、空中グルーミングは、内外の未分化な自閉的世界の中で、視野に映った見慣れた人間の像になされるというのは、あながちこじつけとは言えないであろう。親しい人間がHの前に現われた状況で、その親しい人間がHには意味を持つ。Hはグルーミングによって答える。しかし、その相手にとどかない位置でしか表わせないのである。接触可能な位置に距離が縮まると、緊張が増大して動けなくなってしまう、グルーミングどころでない。空中リップスマッキング、空中を見つめる行動も同じように生じた行動だと考えられる。

では空中グルーミングと交替するセルフグルーミングはどのように解釈すべきであろうか。

ホームケージで単独でいる場合も、Wとともにいる場合も、ビデオカメラで見た条件では、Hは眠っていたり、足で頭部の毛をひいたり、ペニスをさわったり、恒常的で変化の少ない環境の中で、眠気におそわれている様子である。この状態は、空中に定位された行動が止んだ後にも見られた。かかる状態は、昼食後1時間で観察したことの影響もあろう。このような状況で出現した観察者は、眠む気を破る。そして、間にセルフグルーミングをまじえて、空中に向けて行動が続く。そのうちに観察者は図性を失ない、もとの状況にもどる。このように見ると、自閉的な表わし方ではあるが、Hは空中グルーミングに始まって、空中を見つめることで止む一連の行動によって観察者に関わっているのである。その間は、親しい相手に関わりたい、グルーミングをしたい気分支配されていると言えよう。一連の行動のうち、セルフグルーミングだけは、自分の腕に直接なされる。しかし、空中グルーミングもセルフグルーミングも同じグルーミング行動であり、グルーミングをしたい、されたいという気分のうちでなされているように解釈できよう。自然集団においても、社会的グルーミングをしている状況でよくセルフグルーミングが見られる。それは、長くグルーミングをしてそろそろ交替してほしそうなときとか、他個体にグルーミングを始める前とかに見られる。かかるセルフグルーミングは、何らかのコンフリクトによって自己の身体に関心が向いて現れると考えられる。しかし大体は、そのとき社会的グルーミングが現れる状況は保たれていると考えられる。Hのセルフグルーミングも、これらのセルフグルーミングと同様、親しい人間と関わりたい状況の中で、時に何らかのコンフリクトによって自己の身体が目立って生ずるものと考えられる。

以上、空中グルーミングはか一連の行動を、Hの内面性の理解を目ざして再検討してきた。そこで、Hが社会的対象に関心をもって関わろうとするとき、内外の未分化な自閉性が露わになることがわかる。特にHの特異な行動をはじめにとりあげたのは、隔離ザルに特徴的な体験



世界を、極端な捉えやすい形で現象させていると考えたからである。つまり、内外の未分化な隔離ザルにおいては、社会的対象に関わるとき、主観的な身体的状態性が濃厚な自閉的体験世界が、程度の差はあれ現象していることが考えられるのである。つぎに、自分の身体の一部を噛む行動と自慰行動について考えてみる。

#### IV

人間の特徴の中で、直立姿勢を常態とし、手が自由になったことは極めて重要な事実である。手と足の機能の分化は霊長類に起っている。Plessner, H. は、人間の基礎構造を個体発生をたどって確認する過程において、直立姿勢に伴う目と手の領域が優勢になることをあげている。類人猿においては、手と足が分化し、目と手の領域の優勢によって、目と手が協応し、道具の製作ができるところまで至っている (Plessner, H.: 1985, 43~46頁)。目と手の領域が優勢なことは、ニホンザルにおいても認められる。食物は手で口へ運ばれる。麦や大豆などの穀物は、1つ1つつまんで口に運ばれる。形態的には、歩行にもっぱら使われる人間の足に比較してサルの足は指が長く、拇指と他の指は手のように分れており、ものをつかむのに適している。しかし、足は移動以外には、木に登るとき補助や、手で確保した以上の食物をつかんで確保するときや、身体をかくときに使われるくらいである。

淡路島のニホンザル集団は、奇形ザルが多いことで知られている。中道他は、奇形ザルのうち、特に手を欠いたサルの行動に注目している (Nakamichi, M. et al.: 1983)。それによると、Tanago とよばれるサルは、穀物を食べるときには、腕、足、腹部を地面につけて舌でなめとる。大きめのピーナッツなどは、両方の手の欠けた腕の先端でひろいあげ、その上で口で殻を割って食べる。体をかくときは、背や脇腹を腕の先でこすったり、頭を変形したかかとでこする。ときに、石や木に背中をこすりつけることが見られる。セルフグルーミングは、脚の内側を腕の先で毛をひろげてこする。その際、何かをつまみとる行動は見られない。移動能力は正常なサルに比較して発達が遅く、初めて移動できたのは、1カ月経ってからであった。その仕方は、ひじと足で支えて、腹部を地面につけて、いわば全身ではう形であった。正常な個体では、生後第1週からぎこちないが4足で歩くことができる。Tanago は、その後5カ月目に2足歩行が見られたが、不安定でよくころんだ。しかし、繰り返しの中で安定して行き、10カ月目には、主要な移動様式になる。この個体は、足にも奇形があり、右足は2本指で左足は5本指があるが少し変形している。足は正常な、別の手のない個体は、ほぼ同様の行動を表わしている。その個体では攻撃行動が記述されているが、立ちあがって両方の腕をはばたくように前後にふるというパターンであった。母親の順位が高いため、それでコミュニケーションの機能を果たしたということである。3歳から4歳にかけて交尾行動が観察されているが、それは両足で雌の両脚をつかみ、腹部を雌の背に当てて、腕で雌の脇をかかえてなされ

た。このマウンティングは、スラストは見られていない (Nakamichi, M. et al.: 1983)。また、かれらは、長い間母親にしがみつくなことができず、母親はいつも両手か片手で支えていた。母親は食べる時も片手で、移動するときも片手をそえて3本足で移動した。

上の引用から、両手を欠いたサルにおいても、手と足の分化は基本的には正常な個体と変わらないという印象を受ける。しかし、2足歩行が安定して主要な移動様式になる点では、上肢下肢が基本的分業を維持しつつも、分化はより明確に表われるとも言える。われわれ人間から見れば、特に足の正常な個体にあっては、グルーミングや摂食にもっと足を使ってよさそうに思える。足が手の補償をして、手足の分化はあいまいになってもよさそうに思われる。しかし、そのように考えるのは、自己の身体を明確に対象化できる人間だからであろう。ニホンザルにおいては、手足の分化ははっきりしており、それが各々の行動様式に根強く組み込まれているように考えられる。

このような手を欠いたサルが2足歩行を安定したものにし、主要な移動様式とした点は注目される。より詳細に観察された Tanago の場合、5カ月目に初めて2足歩行がなされた。はじめは不安定で、よくころんだのであるが、繰り返しの中でしだいに安定し、10カ月目に入ると主要な移動様式になったと記述されている。2足歩行は、ニホンザルでは物をもって手がふさがっているとき選択される行動であるから、短期間で安定するのではないかと考えられる。しかし、この記述を見るかぎり、かなり長期にわたる試行錯誤を通して安定化したと考えざるをえない。このように解するなら、2足歩行の安定のためには、感覚運動器官の成熟過程が当然あずかっていると考えられるが、一方では、ある方向に動こうとする意図のもと、視覚とならんで身体感覚が不可欠の要因としてあずかっていることも確かであろう。正常個体では生後1週間で4足歩行が現われ、成体では4足歩行が常態である。したがって、Tanago が主要な移動様式とした2足歩行は、生得的な移動図式を再構成したものと考えねばならない。その再構成には、状況の意味に接近したり、さけたりする意図のもとで、ほぼ全身を使っている際の抵抗面が受ける触覚をはじめとする外受容感覚だけでなく、全身の身体感覚、特に前肢後肢に分節された身体感覚が重要な役割を果たすことが考えられる。このこととの関連で、中道があげる自分の身体に関わる行動の頻度は興味深い。Tanago は、同じ時期に出生した正常なサルに比較して、自分の身体に関わる行動が目立って多い。自分の身体に関わる行動は、セルフグルーミング、体をかくこと、自分の腕先のサッキングなどの頻度が合計されたものである。このことは、Tanago において、身体感覚が感じられる機会の多さを示すと考えられる。われわれにおいても、一般に身体を意識するのは、痛みを感じるときや、身体が不調なときである。あるいは、自分の身体が思うに任せられないときである。Tanago にはそのような体験が多いことが推測される。しかし、こう言ったからといって、サルの身体感覚と、人間がもつ自分の身体意識を同一視するのではない。一般に動物においては、身体感覚にしる、外界の知覚にしる、Buytendijk の表現をかりれば、自己を踏み越える (sich übergehen) 形でしかないであ

ろう。つまり事態との感覚運動的結びつきに縛られており、自己や対象から距離をとった姿勢をとることは困難であろう。それができれば、ニホンザルや他の霊長類において生活様式が劇的に変化するはずである。

奇形ザルの行動は、種々の行動における身体諸部位の関連の仕方、特に手足の分業について、基本的に正常個体と変わらないことを示した。このことは、生得的な体制の根深さを示す。と同時に、移動様式という運動形態を足の独立という範囲で再体制化しうることを示した。このことは、上述した自己を踏み越える形は、厳密に言えば、ニホンザルにはあてはまらないことを意味する。不具な身体で生活する重圧のもとで、長期間をかけて、身体感覚を行動の改善に役立てているからである。また奇形ザルには、自分の身体に関わる行動が多く見られた。それは、奇形ザルの状況を推測するとき、身体感覚を産む機会の多さとして理解される。

つぎに隔離ザルがする自分の身体の一部を噛む行動に焦点を当てる。かかる行動は、幼少時には見られず、3歳ころから発現するようになる。欲求阻止の事態や、他への攻撃ができない事態で現われる。前述したように、隔離ザルは、社会的対象に対して内外の未分化な自閉的な関わり方をする。そのような体験世界において、欲求阻止、つまり思うようにならない事態で、身体感覚が目立つことは容易に理解される。したがって、隔離ザルにおいては、攻撃行動を自分の身体に向けることになる。

しかし、隔離ザルによって噛む身体部位が異なる。先に詳述したHの場合には自分の手を噛む。HとケージメイトであるWは足を噛む。これら以外にも自分の身体を噛むサルを見たが、多くは足を噛んだ。

Wは人間がケージに接近すると、脚を抱きながらも自から人間に接近して背を鉄柵に押しつけグルーミングを要求するような行動をする。交尾期に雌と出会った場合に、Hは雌を凝視したり、人間に空中グルーミングをしたりし、雌が接近すると恐れたり、攻撃したりするだけであった。それに対してWは、雌の働きかけの多いときには、マウンティングを繰り返して射精に到った。Hが生後88日目に母から隔離されたのに対し、Wは107日目であった。このように、HもWともに自閉的ではあるが、その程度はHが強いと言えよう。H、W以外で足を噛むザルは、いずれもWより隔離条件が緩く、適応の良いサルたちである。

ここで、この節のはじめに述べた点にもどる。道具を製作しうる類人猿においては、Plessnerが指摘するように、手足が分化し、手と目の領域が優勢になっている。道具をつくることはできないが、手と目の領域が優勢で、手と目の協応が生存に重要な役割を果たすのは、ニホンザルにおいても妥当しよう。手と目の領域が優勢であるということは、手と目の領域が行動において主体性の担い手として重きをなすということであろう。このように解すると、Hが手を噛み、Wが足を噛むことが意味を持ってくるように考えられる。すなわち、Hは手をも噛みうるが、Wは足しか噛まないと言ったことができないであろうか。H、Wのいずれも、自分の身体部位を攻撃行動の対象にするのであるが、Hは一般に主体性を担う手をも攻撃の対象にする。W

は、主体性を担う手は噛まず、主体性のより薄い、対象化し易い足を攻撃対象にすると。

三輪博士は Laing, R.D. の「ひき裂れた自己」を参考にして、つぎのように述べている。正常な人間の場合、自己はその身体と一体になり一つになって、他者と世界とに相対している。つまり、自己は身体を超えて直接外界の対象へ向う。これに対して分裂症状の場合、自己が身体から切り離され、自己と身体とのあいだに断絶が生じ、身体から独立して身体を持たぬものとなった自己が、身体と他者と世界とに対立すると。また自殺について、つぎのように述べられる。自殺は、考える自己が自己の身体を葬り去る行動である。それは、その限りでは、考える存在と身体との差異を如実に示す。しかし、自殺によって、考える自己そのものを抹殺されるかぎり、自殺はかえって、自我と身体との不可分な関係をよりよく示すと。このように分裂症状や、自殺やまたデカルト哲学においても示されるように、人間の場合、自我が自分の身体をまるごと自分ではないように対象化して認識できる。ザルにおいては、正常な場合には、直接外界に向う。つまり、目と手の領域を中心にして、全身体一体となって事態に向うと言えよう。しかし、隔離ザルにおいては、身体の一部を、サッキング、抱くこと、噛むことなどの特定の行動の対象にする。特に攻撃行動において、自分の身体の一部に対して外物であるように関わる。そして、通常にあっては、主体性を担う手を噛むHは、それだけ内閉性が強いと考えられる。Wのような自閉性の程度の低い個体の場合には、目と手の領域は優勢を保ち、主体性を担い、周辺にある足が攻撃行動の対象になる。

さきに、Hのセルフグルーミングに言及した際に、自然集団で社会的グルーミングが生じる状況で現れるセルフグルーミングにふれた。かかるセルフグルーミングは、コンフリクトによる緊張を解放する機能を持つと考えられた。この場合、自分の手をするときは、他個体へのグルーミングが止んだ直後に見られることが多い。それから一呼吸おいて脚などの部位へ移ることがある。今後の資料の積み重ねが必要であるが、手のセルフグルーミングと、脚のそれは微妙に異った印象を受ける。後者では、対象化がより明白で、意図性がより強い印象を受ける。目と手の領域が、外界に関わる行動において、主として主体性を表わすことは、両手を欠いたサルにも認められ、ニホンザル一般について言えよう。かかる目と手の領域の優勢、手と足の分化は、外界に関わる行動だけでなく、自分の身体を対象化する行動においてもその意味を保つのではないかと推測される。

隔離ザルでは、欲求阻止事態で、主体は、身体感覚に表われ、視覚で捉えた自分の身体の一部を、外物であるかのように扱かう。Hの場合、手を噛むが、そのことは外物のように扱かう範囲がより広く、主体の座はより限局されて歯に表われるとも言えよう。このように考えると、ある意味の心身の分裂として、自分のでありながら、自分のでない身体部位が現われることとして内閉性がとらえられるように思われる。社会的行動領域において、隔離ザルに、そういった内閉性が現われると考えることができよう。ただし、心身の分裂といっても、人間の場合には、自我が身体をまるごと対象化し、自分ではないように対象化された身体は、認識の対

象にもなる。しかし、ニホンザルの場合には、自分の身体の一部を噛むという行動のうちに心身の分裂が現われているという意味である。

自慰行動についても自分の身体を噛むことと同様に考えることができよう。自慰行動は自然集団においても見られる。特に強いリーダーシップを発揮したリーダーによく見られた。強いリーダーシップのせいか、交尾期に雌に敬遠され、拒否されたためと思われる。かかるリーダーや、隔離ザルが自慰行動を現わすのも、基本的には、欲求阻止による身体の現われによるのでないかと考えられる。異性に関わりたい気分にあって、それが拒否や自閉性のために阻止されたとき、性が視覚的にも、身体感覚的にも目立つであろう。おそらく、自慰行動が自然集団でも見られるのは、その身体感覚が強いからであろう。そのリーダーは、もっぱら自慰行動をするのでなく、雌との性交渉も行なう。しかし、隔離ザルにおいては、ほとんど自慰行動しかない。ただ自慰行動には、身体を噛むこととはちがって、快感というプラスの意味が伴う点は見のがせないであろう。ただし、ニホンザルのレベルでは、人間のように耽溺性に発展することはないであろう。行動の結果としての快感そのものを追求することは、ニホンザルでは可能性の少ないことであろう。

奇形ザルに高頻度で見られた自分の身体に関わる行動や、あるリーダーによく見られた自慰行動や、頻繁に現われるセルフグルーミングは、自然集団で観察された自分の身体に関わる行動である。それらの発現には、知覚的定位とともに、欲求阻止による身体感覚から結果する身体の現われがあずかっていると考えられる。

一方隔離ザルは、それらの行動以外にも抱く、吸う、噛む行動を自分の身体に向けた。自分の身体に向けられる行動でも、グルーミングは少なくとも毛や皮膚の異物をとる意味があり、また不自然な印象も受けない。しかし、自分の身体を抱いたり、吸ったり、特に噛んだりする行動は意味がない。かかる自己志向性の行動は、本来相手に向けられるものであり、自分に向けるのは無意味そのものである。その無意味さの中に、隔離ザルの異常性が存すると言えよう。その無意味さは、自閉性、内閉性により、社会的相手への関わりを閉ざされたかれらの生きざまである。

## V

以上、隔離ザルの内面性を探る試みをした。結論的に言いたいのは2点である。1つは、Hの凝視行動や空中に向けられる諸行動から推測されるように、隔離ザルが内外の未分化な主観的状态性の濃厚な自閉性を現わすということである。

他の点は、自分の身体を噛むことから考えられる、行動に現われる心身の分裂、つまり自分の身体を外物であるように攻撃対象とするあり方である。通常であれば、諸行動において主体性を表わす手を噛む個体もあり、その場合には、主体性は歯に縮限されて現われるとも言えよ

う。かかる意味での内閉性である。

ここで扱ったニホンザルは、まさに文字通りの身体的主体である。つまり、感覚器官、運動器官をはじめ、解剖学的構造を備えて、外界や身体に関わる主体で、身体から離れた考える自分、すなわち精神を持つとは考えられない主体である。すなわち、動物としての主体である。かかる身体的主体においても、母から早期に隔離されるという厳しい生育条件のもとでは、上述のような自閉性、内閉性が現われる。自閉性を主症状とする人間の精神疾患においても、そうした疾患が形成されるには、やはり身体性の中に主要因が求められねばならないと考えられる。また、生育歴の中にそれが求められねばならないと考えられるのである。

#### 参 考 文 献

- Buytendijk, F. J. J. 1970 人間と動物 浜中淑彦訳 みすず書房
- 前田嘉明 1952 生活体と共感性Ⅰ．パトスの感覚と共感現象 東京女子大学論集 第2巻 3
- 三輪 正 1977 身体の哲学—意味・言葉・価値 行路社
- Nakamichi, M. 1983 Development of a congenitally malformed japanese monkey in a free-ranging group during the first four years of life. American journal of Primatology 5.
- Makamichi, M. et al. 1983 Behaviore development of a malformed infant in a free-ranging group of japanese monkeys. Primates 24(1).
- 岡野恒也編著 1983 霊長類心理学Ⅰ ブレーン出版
- Plessner, H. 1985 人間の条件を求めて 谷口茂訳 思索社
- 鵜飼信行 1975 隔離ザルの社会行動—事例 Hide の特異な空中グルーミング—大阪大学人間科学部 紀要 第1巻
- 鵜飼信行 1977 隔離ザルの社会行動—性行動を中心に— 佛教大学人文学論集第11号
- 鵜飼信行 1985 欲求阻止事態における行動の比較心理学的検討 佛教大学人文学論集 第19号
- Werner, H., Kaplan, B. 1974 シンボルの形成 柿崎祐一監訳 ミネルヴァ書房